

鶉うづらの床とこは深草野の叢に巢をくむをいふなり。「此野に鶉うづらの床とこといふ所一所あり、竹たけの葉山はやまの辺なり、後世和歌により

てなづくるものか」むかしより鶉の名所にして、声は他境に勝れたりとて、都下の詞客仲秋の頃こゝに來りて美声を聞。

「惣じて鶉はあれたる野に鳴ものなり。万葉には鶉なくふりにし里とよめり。殊ふかくさに深草は荒て露ふかきあたりなれば、

鶉の床もしめて名のみなるさまなり。深草に鶉を詠合す事は此心にての作例多し」

千 載 夕ざれば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草ふかくさの里 俊 成

「此歌をある人難じて、只秋風ばかりにてをかで身にしむがあしきといひしを。俊成しゅんせい卿のいはく、是を風の身にし

むと思ひてはさらに曲なし、鶉となりての風も身にしみてふかく思ふといふこゝろなりと申され給ひしかば、傍人

胆を消して逃しとなり」

続 古 深草ふかくさの山のすその、浅ぢふに夕風寒みうづら啼なり 寂超法師

新 拾 深草やうづらの床は跡絶て春の里とふ鶉のこゑ 後京極撰政